

石州瓦

北海道市場開拓を強化

島根県西部の瓦メーカー8事業者でつくる石州瓦工業組合（江津市嘉久志町、佐々木賢一理事長）が、北海道市場の開拓を強化している。凍害に強い特性のPRが実り、今春完成した道内の公共施設に採用。かつて、北前船交易で石州瓦や石見焼が運ばれた歴史的なつながりも、販促活動に生かしている。

凍害に強い 北前船ゆかり

PR実り公共施設採用



石州瓦が採用された北海道の伊達市観光物産館（石州瓦工業組合提供）

北海道の住宅の屋根瓦の特性を宣伝すれば凍害を防ぐため、金ば、市場開拓が可能と属材が主流。同組合によると、石州瓦の出荷は近年、ほとんどなかった。

一方で、神社などの歴史的建造物には粘土瓦が多く、石州瓦も明治期建立の寺院に使われているほか、「はん」と呼ばれる石見焼の水がめも多数現存。多くは、北前船で運ばれたとみられる。

こうした歴史的な背景に加え、他産地に比べて焼成温度が高く、水分がしみにくいため、凍結による亀裂などが起こりにくい石州

風建築をコンセプトに今年4月、道南西部の伊達市にオープンした市観光物産館には、約1万枚が使われた。

また、同館の屋根施工者を含む北海道の3業者の5人が1月、大田市内であった「かわらぶき技能士資格2級」の実技検定に合格。石州瓦工業組合によると、道内業者の受験自体が珍しく、普及の追い風になると期待する。

具体的には、屋根工事業者や自治体に足を運び、道内の研究機関の試験で実証された耐寒性の高さをアピールするとともに、「北国仕様」とうたった特製パンフレットも持参。北前船による交流の歩みも紹介する。

11年実績で約6505万枚だった全体の出荷量から見ると、まだわずかながら、同組合の佐々木啓隆専務理事は「函館市や小樽市などの観光地の歴史的建築物は、保存改修で瓦のふき替え需要も見込まれる」と説明。市場開拓に力を注ぐ考えだ。

瓦が起こりにくい石州